

時代の風 西水美恵子 世界銀行 元副総裁

人口減少の局面を迎えたからか。それとも産業界が外国人労働者の受け入れを強く要望するからか。「移民開国」を経済活性化の一策と見る論を、頻繁に耳にするようになった。

そのつど、パンドラの箱を連想する。ギリシャ神話の最高神ゼウスが、地に降りる人類最初の女性、パンドラに持たせた箱。好奇心旺盛な彼女が神々の命令に背いて開けた箱からは、災いの全てが飛び出し、希望だけが残った。

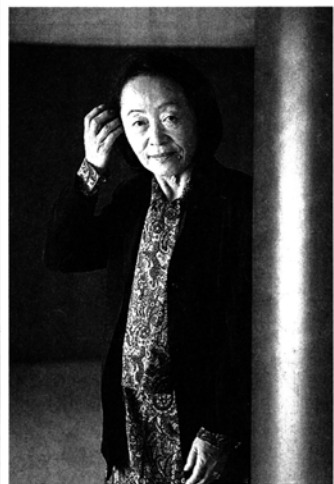
人類の歴史は移民の歴史。この世に単一民族国家は存在しない。が、今日のわが国はそれとごく近く、同一民族と見なされる大和民族が、人口の95%以上を占める。そのような国は、南北の朝鮮と、アイスランド、アイルランド、アルバニア、ポーランド、ポルト

移民開国というパンドラの箱

住む異民族への偏見や差別も、いまだ消えない。しかし、今日の大和民族は、多民族国家の苦難を肌で知らない。私は、それが怖い。

私ごと、長年移民の国米に住み、世界銀行業務の現場である途上国も全て多民族国家だった。紛争さえ

文化共有する覚悟を



一竹内紀臣撮影

引き起こす人種差別や民族戦争など、社会経済の発展を脅かす不安定が当たり前な環境。それが生活の場であり仕事の間でもあった。米国は異なる人種が融合する「るつぽ」と言われるが、多民族のモザイクと呼ぶほうが似合う。学生時代には、外国人に優しい国だとして疑わなかったが、プリンストン大学に就職し

た際必要になった永住権申請で、目が覚めた。移民局はバワハラ常習者が勢ぞろいだった。虐待的な言動を見るに堪えかねて、言葉を選んで注意したら、米国民から仕事を奪うやつが生意気を言うな！と、怒鳴られた。当時は法的に優先され、大学がスポーツに優れた助教授でも、ンサーに付いた助教でも、そうだったから、一般労働者が受ける仕打ちには想像を絶した。手続きを共にした同僚の英国人助教は「移民局の組織文化は米国の鳥瞰図」と嘆き、早々と母国に帰ってしまった。

永住権取得から足掛け40年。昨年、出張帰りの入国審査では「市民権をどうなのか」とまで聞かれた。「ハートの問題、星条旗に忠誠を誓うとうそになる」と答えた。深くなすいて「市民になってほしい人だ」と笑った審査官が、移民大の病根をすばり言い当てた。「違法合法に関わらず増えるのは、金稼ぎ移民だけだ。経済移民は、帰化したも祖国への忠誠を変えない。ユタヤ系市民はもとより、高額所得者層の大半を

占めるパキスタンやインド系市民も、外交政策を祖国のために操る。彼らはいつかこの国をだめにする」とそのパキスタンやインドをはじめ、仕事上付き合いの長かった南アジア諸国の指導者らは「多様なルーツの民族が今はひとつにまとまったミエコの国が羨ましい」と、よく言っていた。近年まで国籍法や移民政策を持たず、移民開国同然だった国々の指導者だ。大英帝国から独立を勝ち取ったと思いきや、民族間の紛争や少数民族独立活動が台頭し、いまだ平和を知らない国も少なくない。

彼らは、単一文化でも複数でも、その文化を皆で共有する社会に属するという安堵感は、一国の民たる自己認識の核だと、主張する。「移民政策は国家への帰属意識を左右し、間違えば国

体維持さえも脅かす」と口をそろえていた。

母国に住んだのはわずか17年。全人類を職員1万人に縮小したような世銀に勤め、その上、選んだ連れ合いは英国人。なのに、いつまでたっても日本人なのだろう。「あうん」の意思疎通を不思議とも思わない同胞が恋しくて、居たたまれなくなることがある。文化を共有する安堵は、失ってみないと分からない。

パンドラの箱は開いた。残る希望は、大和民族がたどった同一化の道そのものである。異国の文化を吸収しつつ豊かに変わりゆく日本文化を共有する国を、意図して作る覚悟が要る。この覚悟を国策として世界に開く日本なら、憧れて帰化を望む外国人も増え、わが国を大いに潤すはずだ。

ガル、そして南太平洋に散らばるポリネシア系民族の島国数カ国のみらしい。

大小さまざまな民族移動の波は、古来、日本列島にも到達してきた。大和民族とは、長い歴史の時を経て文化が同一化した結果だと聞く。むろん民族間のさまざまな葛藤は、戦争も含めて、わが国にも爪痕を残した。悲しいことに、列島に

引き起こす人種差別や民族戦争など、社会経済の発展を脅かす不安定が当たり前な環境。それが生活の場であり仕事の間でもあった。米国は異なる人種が融合する「るつぽ」と言われるが、多民族のモザイクと呼ぶほうが似合う。学生時代には、外国人に優しい国だとして疑わなかったが、プリンストン大学に就職し

た際必要になった永住権申請で、目が覚めた。移民局はバワハラ常習者が勢ぞろいだった。虐待的な言動を見るに堪えかねて、言葉を選んで注意したら、米国民から仕事を奪うやつが生意気を言うな！と、怒鳴られた。当時は法的に優先され、大学がスポーツに優れた助教授でも、ンサーに付いた助教でも、そうだったから、一般労働者が受ける仕打ちには想像を絶した。手続きを共にした同僚の英国人助教は「移民局の組織文化は米国の鳥瞰図」と嘆き、早々と母国に帰ってしまった。

永住権取得から足掛け40年。昨年、出張帰りの入国審査では「市民権をどうなのか」とまで聞かれた。「ハートの問題、星条旗に忠誠を誓うとうそになる」と答えた。深くなすいて「市民になってほしい人だ」と笑った審査官が、移民大の病根をすばり言い当てた。「違法合法に関わらず増えるのは、金稼ぎ移民だけだ。経済移民は、帰化したも祖国への忠誠を変えない。ユタヤ系市民はもとより、高額所得者層の大半を

占めるパキスタンやインド系市民も、外交政策を祖国のために操る。彼らはいつかこの国をだめにする」とそのパキスタンやインドをはじめ、仕事上付き合いの長かった南アジア諸国の指導者らは「多様なルーツの民族が今はひとつにまとまったミエコの国が羨ましい」と、よく言っていた。近年まで国籍法や移民政策を持たず、移民開国同然だった国々の指導者だ。大英帝国から独立を勝ち取ったと思いきや、民族間の紛争や少数民族独立活動が台頭し、いまだ平和を知らない国も少なくない。

彼らは、単一文化でも複数でも、その文化を皆で共有する社会に属するという安堵感は、一国の民たる自己認識の核だと、主張する。「移民政策は国家への帰属意識を左右し、間違えば国

体維持さえも脅かす」と口をそろえていた。

母国に住んだのはわずか17年。全人類を職員1万人に縮小したような世銀に勤め、その上、選んだ連れ合いは英国人。なのに、いつまでたっても日本人なのだろう。「あうん」の意思疎通を不思議とも思わない同胞が恋しくて、居たたまれなくなることがある。文化を共有する安堵は、失ってみないと分からない。

パンドラの箱は開いた。残る希望は、大和民族がたどった同一化の道そのものである。異国の文化を吸収しつつ豊かに変わりゆく日本文化を共有する国を、意図して作る覚悟が要る。この覚悟を国策として世界に開く日本なら、憧れて帰化を望む外国人も増え、わが国を大いに潤すはずだ。